

東北大学国際文化研究科 特別講演＋質疑応答

難民キャンプに生まれ育った「サハラウィ」（西サハラの人びとは自らをそう呼ぶ）として、西サハラの問題をどう学び、いかにして民族運動に参加するようになったのか。難民の若い世代はどんな未来を展望しているのか。難民キャンプはいかなる問題を抱えているのか。そして国際社会に何を望むのか——。この講演では、これらのことについて当事者から話を聞きます。

ファトマ・ブラーヒームさん講演会 —西サハラ 自由に平和な祖国へ帰れる日を夢見て—



チンドゥーフにあるサハラウィの難民キャンプ。1975年から国際機関等の支援に頼って暮らす。キャンプの人口は約17万人。（撮影・岩崎有一氏, 2019年）

西サハラとは？

<アフリカ最後の植民地>西サハラは1975年、スペインからの独立過程でモロッコに侵略され、以来その80%が占領下にあります。国連は1991年に住民投票の実施を決めましたが、モロッコのサボタージュと大国の思惑によって実現していません。アルジェリアの難民キャンプに拠点を置くサハラウィ（西サハラの人びと）は「サハラ・アラブ民主共和国」の樹立を宣言し、モロッコの占領下に暮らすサハラウィは激しい弾圧を受けながらも非暴力の抵抗運動を続けています。難民キャンプには約17万人が暮らし、住民投票を経て、解放された祖国に帰れる日を待ち望んでいます。そのためには世界の市民の声が必要です。

* 西サハラ問題について詳しくお知りになりたい方は、以下の「西サハラ友の会」のウェブサイトをご覧ください。

<https://fws.jp.org/>